
みつめる

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みつめる

【Nコード】

N7555Q

【作者名】

大森ろら

【あらすじ】

幼い頃に見た不思議な白い目。月日が経ち、ある出来事をきっかけにして、その正体が明らかになる。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。

<http://rorora.ikidane.com/>

懐かしい？ ああそうね。無理もないわ。思い出さない？ この縁側、この庭の感じ。え？ 覚えてないの？ やだわ、あなたもう小学生だったじゃない。

熱い緑茶で舌を軽く火傷させながら姉にそう笑われ、わたしは一度目を伏せてから庭を眺めた。半年前に嫁いだ姉の新居を初めて訪れたのだが、この懐かしさはなんだろう。

「あ」

そうだった。

ずっと忘れていた。

姉の言ったように、当時わたしたちはまだ小学生だった。

庭付きの貸家に移り住んだ途端に父が病で倒れて昏睡状態が続いていた。母は毎日病院に通い、父に付き添っていた。それで、母の母、つまり祖母が毎日家に通ってきてくれてわたしたち姉妹の面倒をみてくれた。

わたしは毎日、学校から帰ってくると縁側で塗り絵をしたり本を読んだりして過ごした。

そう。あのときも縁側でひとり本を読んでいた。すると、ふと視線を感じて（あれ）を見たのだった。

家は石塀にぐるりと囲まれていたのだが、石塀には風通しをよくするために穴のあいた透かしブロックと呼ばれるものが塀の上の方に点々と並んでいた。その穴から誰かがこちらを覗いていた。覗いている目を確かにわたしは見た。不思議なことにその目は白く濁っていた。わたしは恐怖のあまり声も出させず、そのまま視線をスカートの上においた本に落とした。それからしばらくして、なにか用事でも思い出したようにさっと立ち上がり、祖母と姉の姿を探しにいった。姉は子供部屋で宿題をしていた。

「どうしたの、どうしたの」

興奮して自分でも意味のわかっていないことをまくしたてるわたしを落ち着かせながら、姉は嫌がるわたしの腕をとって無理矢理縁側に連れていった。

「どこなの」

私は恐る恐る振り返り、白濁した目が覗いていた塀を指差した。

「なにもないじゃないの」

姉はさつと庭におりるとすたすたと歩いて塀の透かしブロックを覗きこんでいった。わたしはいつ姉が悲鳴をあげるかとびくびくしていた。

「なんにもないじゃない」

呆れたような姉が責めるような声音で言った。

よく見てみると、確かにあの白く濁った目は消えていた。

姉は宿題の邪魔をされたことに腹をたてて文句を言いながら子供部屋に戻ろうと歩き出した。そんな姉の後ろをわたしは慌てて追いかけた。

「なんでついてくるの」

「わたしも勉強する……」

ひとりで縁側にいたら、またあの目に覗かれそうな気がした。あの異様な目が脳裏に焼きついて離れなかった。

それから数日後。

またわたしはあの目を見てしまった。

その時わたしは庭の鉢植えに水をあげていた。母が引越し祝いに買ってきたマリーゴールドだった。母が水をあげていたのを覚えていて、母のかわりにわたしが水遣りをしていた。

プラスチックのジョウロで水をあげていると、また視線を感じてはつと振り返った。すると前とまったく同じ白く濁った目が透かしブロックの穴から覗いていた。今度は前よりも近い場所にいたので、その目をはつきりと見てしまった。それは人間の目だった。じつとわたしのことを見つめていた。人間の目ははずなのに、白く濁っているの、人間じゃないようにも見えた。でも人間以外ありえな

った。わたしは悲鳴をあげていた。

「どうしたの！」

祖母が顔色を変えてわたしのところに飛んできた。

「誰か覗いてる！」

わたしは叫んだ。祖母はさつと怖い顔になって塀を睨んでから、慌てて外に出ていった。わたしは縁側から部屋の中に逃げ込んで部屋の隅で震えていた。

しばらくして戻ってきた祖母はわたしの肩をそつと抱いて「もう誰もいなかったわ。何か言われた？」とたずねた。

「目が白かったの」

「え？」

「真っ白な目だったの」

祖母は口を僅かに開いて、わたしを心配そうにじつと見つめた。

それから「大丈夫よ」とわたしを抱きしめた。わたしはまだぶるぶると震えていた。

その夜、姉がわたしに言った。

「お祖母ちゃんから聞いたよ。また誰か覗いてたんだって？ それも白い目が」

姉の口ぶりから信じてくれないことが分かった。わたしは返事をしないでふいと姉のそばから離れた。

塀の穴が怖くて縁側や庭に近づかないようになった。今度またあの目を見たら自分がどうなってしまうかわからなかった。ただただ怖かった。

そんなある日、帰宅すると姉が慌ててやってきて言った。

「犯人がわかったよ」

なんでもついさつき、透かしブロックの穴から家を覗いている小さな女の子を見つけたのだという。女の子は透かしブロックに手をかけて器用にボールに乗っかっていたらしい。姉はその子に何をしているのと声をかけた。すると女の子は、前にこの家に住んでいた家の子であることがわかった。近くのアパートに引越したのだが、

庭で遊んだことが懐かしくて時々この家に戻ってきていたのだという。

「覗いていたのはその子だったんだよ」

「そうなのか、とわたしはほっとした。でもすぐにはっとして、「目はどんな目だった？」と姉にたずねた。

「目？」

「白かった？」

まさか、と姉は笑った。普通の目だよ。あんたやわたしと同じ黒い目。光の加減で白く見えただんでしょ、と姉は言った。

それから間もなくして父が亡くなり、わたしたちは祖父母の家で暮らすことになった。

祖父母の家には庭も石塀もなかった。かわりに裏山があり、わたしと姉はそこでいつも遊んだ。

「どうしたの？」

姉の声にわたしははっと我にかえた。なんでもない、とわたしは姉の新居の庭を眺めるのをやめ、姉が新生活について話すのに耳を傾けた。

久しぶりに父のことを思い出して心に小さな波紋が広がった。父のことはよく覚えていなかった。記憶にあるはずの顔はおぼろげで輪郭も定かではなかった。

それからしばらくしたある夜、母から電話がかかってきた。

遠縁の親戚が危篤状態になって今夜が峠だという。伯母の方に連絡が来て、母も来てはくれないかと伯母に頼まれたのだという。「あなたに車を出して欲しいの」

夜も遅かったが、伯母には以前世話になったこともあり、わたしは車を出して、途中で伯母と母を拾い、その遠縁の親戚が入院している病院に向かった。

それほど広くない個室に家族や親戚が六人ほど集まってベッドを取り囲んでいた。自然と輪が開き、わたしたちは輪に加えられた。

横たわっている女性は白髪の老女だった。意識はないらしいのに、

目は開いていた。まるで目覚めているかのように天井をまっすぐに見つめていた。

その目を見て、わたしは思い出した。

父の最期を思い出した。

ベッドに横たわる父。目はぱっちり開いていた。意識がないのに目はずっと開いたままだった。父は死にかけていた。死は父の体を端から徐々に奪っていった。わたしにはそれがわかった。父がまだ生きていることは上下する喉仏が教えてくれた。だからわたしはじっと喉仏を見つめていた。そして時折、ちらつと父の顔を見た。父の目は開いたままで閉じる気配がまったくなかった。だがやがて、異変が起こった。目がゆっくりと、白く濁っていったのだ。白い膜が、なにかを見続けようとする父の視界を奪っていった。

そう。それはあの目だった。塀の穴からわたしをじっと見つめていた目。白い目。あれは父の目だったのだ。父はずっと、じっと、わたしを見ていた。

すすり泣く声が周囲で起こった。

医師が腕時計を見て、「一時三十一分。ご臨終です」と告げた。

妹さんらしき女性が死者のまぶたを閉じさせようとした。しかしうまくいかなかった。わたしはそっと彼女の腕に触れ、「そのまま大丈夫ですよ」と囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555q/>

みつめる

2011年5月11日19時40分発行